

女子大学生の結婚観と職業観の調査

Investigation of work values and the concept of marriage of college students at a women's college

城島 博宣^{*}・白河 桃子^{**}・幸田 達郎^{***}・城 佳子^{****}

Hironobu JYOJIMA, Touko SHIRAKAWA, Tatsuo KODA, Yoshiko JOH

キーワード：女子大学生・結婚観・職業観・ライフスタイル

要旨：近年の日本における社会問題の一つに少子化の問題がある。少子化の一因として、女性の非婚化や晩婚化の問題がしばしば取り上げられる。女性の非婚化や晩婚化が進んでいる背景には、女性のライフスタイルが多様化した事が考えられる。

そこで本研究では、女性から結婚観やジェンダー観、職業観に関してアンケート調査を行い、女性の結婚観や職業観、そこにズレが生じているかを調査することを目的とした。その結果、本研究の調査対象となった28%の女子大学生が、結婚観や職業観の間にズレが生じている事が明らかになった。また、本研究の調査対象となった女子大学生の望むライフコースは、ゆるく働き続けつつ、早期に結婚し、出産するという事、もしくは子育て期間中は一時的に家庭に入り、子育て後にパートなどで復帰するという事が明らかになった。今後はさらに多くの大学や学年において調査を行い、検討を進めていく必要があるだろう。

1. 問題と目的

近年の日本における社会問題の一つに少子化の問題がある。2010年に合計特殊出生率が対前年比で0.02上昇し、1.39となったが（厚生労働省 2011）、依然少子化の問題は深刻である。少子化の一因として、女性の非婚化や晩婚化の問題がしばしば取り上げられる。

女性の非婚化や晩婚化が進んでいる背景には、女性のライフスタイルが多様化した事が考えられる。特に、男女雇用機会均等法の施行により、女性のライフスタイルが多様化し、女性の職業観は変化して来ている。例えば森本・中嶋・山地（2000）が女子大学生に対して行った調査で

^{*} じょうじま ひろのぶ 文教大学大学院人間科学研究科

^{**} しらかわ とうこ 文教大学生生活科学研究所客員研究員

^{***} こうだ たつお 文教大学人間科学部

^{****} じょう よしこ 文教大学人間科学部

は、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対して、賛成・どちらかと言えば賛成を合わせた賛成派が調査対象者の34.5%、反対・どちらかと言えば反対を合わせた反対派が54.3%であり、反対派が過半数であるという結果を得ている。これは、「男は仕事、女は家庭」という日本の伝統的な性別役割分業という文化は薄れつつあり、就労継続の希望や、働くことに対して重要な価値を見出す女性が増加している事を意味する。しかし山田・白河（2008）は、就職に対する規制緩和が発生すると同時に結婚に対する規制緩和が発生し、結婚年齢がばらつく事によって発生する「晩婚化」、結婚したくてもできない「非婚化」が生じ、それらが少子化の直接の原因になっていると述べている。

女性の非婚化や晩婚化を解決する手段の一つとして山田・白河（2008）は、「婚活」という結婚活動を提唱した。彼らの著書である『婚活』時代』には、婚活を提唱した背景として以下の様な記述がある。

「結婚活動とは、就職活動のアナロジーとして作られた言葉です。今ではよりよい就職をするために、情報を集め、～中略～ 同じように、よりよい結婚を目指して、合コンや見合い、自分磨きなど、積極的に行動をする人が出てきています。それらの活動を結婚活動と呼ぶことにしました。就職活動は略して「就活」だから「結活」でしょうか、いや、結活は発音がしにくいから「婚活」にしたらと提案したのが、この言葉の由来です（はじめにより抜粋）。」

「婚活」という言葉が世の中に浸透し、企業による婚活サービスや、地方自治体主催の婚活イベントが催されることが多くなってきたが、依然少子化の問題が解決に向かっていっているとは言い難い。白河は『婚活現象の社会学』（2010）の中で、「婚活は誤解されて広まった」と語っている。山田・白河が意図したのは「昭和的結婚観からの脱却」であったのだが、結果的には誤解が生じたままブームとなった。

昭和的結婚観とは、(1)待っていても誰もが当たり前結婚できる、(2)男性が一家を養う、ことを指す。しかし(1)の方は女性中心に浸透したが、(2)のほうには変化がなかったため、結果的に婚活する女性たちの対象が「少数の、一家を養える安定した企業の男性」に集中してしまった。すでに婚活の限界は見え始め、女性たちの望む「十分な安定収入がある」男性たちがすべて結婚してしまった時点が、婚活の数の限界と考えられる。

昭和的結婚観（一家を支える大黒柱である夫と、家事育児中心でパート程度の収入を得る主婦という組み合わせ）のまま、婚活をしても、男性の収入が下がっている社会情勢から、「養ってくれる男性」を求めるほど女性たちは未婚、晩婚のスパイラルに陥る。

「男は仕事、女は家庭」という昭和的結婚観に対して反対と思う女性が増えているのにも関わらず、相変わらず「男性に一家の担い手」を望む結婚観は健在なのか。実は女性たちの仕事観は「一家の主な家計は男が担い、女性は家計責任を負わず、自己実現のために働く」というものではないか。現代女性たちは、「結婚して養ってもらうのが基本」というベースのもとに、働き方を選択している可能性がある。そしてその背景には、女性の結婚観やジェンダー観と、職業観の意識の間にズレが生じている可能性があると考えられる。

そこで本研究では、女性から結婚観やジェンダー観、職業観に関してアンケート調査を行い、

女性の結婚観や職業観、そこにズレが生じているかを調査することを目的とした。本研究によって女性の結婚観やジェンダー観、職業観のズレが明らかになれば、そのズレを修正することによって女性の非婚化や晩婚化に対して対策を講じることが出来る。それによって、本研究が少子化という社会問題を解決するための一助となる可能性があることに、本研究の意義があると考ええる。なお、本研究の調査対象者は、女子大学に通う大学生に限定した。結婚予備軍である女子大学生の結婚観やジェンダー観、職業観のズレが明らかになれば、ズレを解消する介入の方法を検討することが出来るようになり、将来的な非婚化や晩婚化を防げる可能性があるからである。また、本研究の調査対象となった女子大学は、中堅の良妻賢母教育からスタートした女子大である。このことから、将来の働き方やライフスタイルの志向として結婚、出産が落ち着いた後に再び働きだすM字型就労、または専業主婦が多いと考えられる。

2. 方 法

(1) 調査対象

東京の中堅女子大の女子大学生 509 名が調査対象となった。

(2) 手続き

2011 年 6 月、大学の講義時間に無記名で、個別記入式の質問紙調査への回答を求めた。また、調査は匿名で行われることから、通常の同意文書の作成は不可能であり、回答することで調査への同意表明とみなされるものとした。

(3) 調査内容

本調査のために白河が作成した結婚意識に対するアンケート用紙を使用した。

(4) 分析方法

エクセルを用いて項目ごとに回答を単純集計した。また、いくつかの項目についてはクロス集計を行った。

3. 結 果

(1) 回答者の年代

回答者の年代について、1. 20 代、2. 30 代、3. 40 代、4. 50 代もしくはそれ以上、5. 10 代、の中から回答を求めた。その結果、1. 20 代が 18%、5. 10 代が 82%であった。

(2) 結婚相手に求める学歴

結婚相手に求める学歴について、1. 短大、専門学校卒以下、2. 大東亜帝国クラス、3. 日東駒専クラス、4. 成蹊、成城、明治学院クラス、5. MARCH クラス、6. 国立早慶上智 ICU クラス、7. 気にしない、の中から回答を求めた。その結果、1. 短大、専門学校卒以下が 3%、2. 大東亜帝国クラスが 6%、3. 日東駒専クラスが 18%、4. 成蹊、成城、明治学院クラスが 12%、5.

MARCH クラス 18%、6. 国立早慶上智 ICU クラス 4%、7. 気にしないが 39%であった。

(3) 職業観について

職業観について、出産したら仕事はどうするかという質問を行い、1. 辞める、2. 産休、育休を使い継続就業する、3. 子育てが終わったら正社員として復帰する、4. 子育てが終わったらパート、非正規で復帰する、の中から回答を求めた。その結果、1. 辞めるが 11%、2. 産休、育休を使い継続就業するが 51%、3. 子育てが終わったら正社員として復帰するが 12%、4. 子育てが終わったらパート、非正規で復帰するが 26%であった。

(4) 主な家計の担い手について

主な家計は男性が負うべきかどうかについて、1. はい、2. いいえ、のいずれかで回答を求めた。その結果、1. はいが 51%、2. いいえが 49%であった。

(5) ジェンダー観について

ジェンダー観について、男は仕事、女は家庭中心が良いかどうかという質問を行い、1. はい、2. いいえ、のいずれかで回答を求めた。その結果、1. はいが 40%、2. いいえが 60%であった。

(6) 理想のライフスタイルについて

理想のライフスタイルについて、1. バリキャリで一生働く、2. バリキャリで太く短く働く、3. ゆるキャリで細く長く働く、4. いつかは専業主婦の中から回答を求めた。その結果、1. バリキャリで一生働くが 13%、2. バリキャリで太く短く働くが 6%、3. ゆるキャリで細く長く働くが 55%、4. いつかは専業主婦が 26%、であった。

(7) 結婚観について

結婚観について、理想の結婚という質問を行い、1. 早婚で早産、2. 早婚で晩産、3. 晩婚で晩産、4. 子供はいらない、5. シングルマザーも可、の中から回答を求めた。その結果、1. 早婚で早産が 59%、2. 早婚で晩産が 21%、3. 晩婚で晩産が 8%、4. 子供はいらないが 10%、5. シングルマザーも可が 2%であった。

(8) ジェンダー感の乖離について

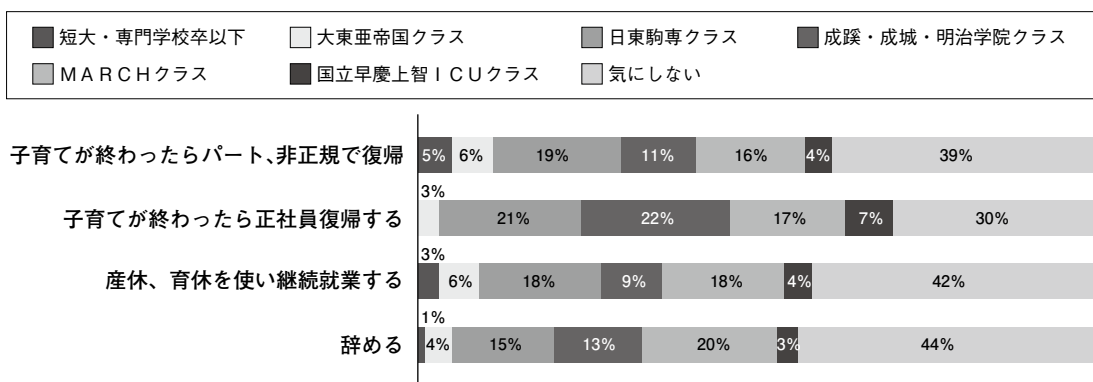
ジェンダー感の乖離について分析するため、主な家計の担い手についての質問項目と、男は仕事、女は家庭中心が良いかどうかの質問項目の一致度を求めた。その結果、回答者の 72% が一致、28% が不一致と言う結果であった。

(9) 職業観と結婚相手に求める学歴の関係

職業観と結婚相手に求める学歴の関係を探るため、両質問項目のクロス集計を行った。その結果、職業観の質問項目において辞めると答えた回答者の 1% が短大・専門学校卒以下、4% が大東亜帝国クラス、15% が日東駒専クラス、13% が成蹊、成城、明治学院クラス、20% が MARCH クラス、3% が国立早慶上智 ICU クラス、44% が気にしないと回答した。産休、育休

を使い継続就業すると答えた回答者の3%が短大・専門学校卒以下、6%が大東亜帝国クラス、18%が日東駒専クラス、9%が成蹊、成城、明治学院クラス、18%がMARCHクラス、4%が国立早慶上智ICUクラス、42%が気にしないと回答した。子育てが終わったら正社員として復帰すると答えた回答者の3%が大東亜帝国クラス、21%が日東駒専クラス、22%が成蹊、成城、明治学院クラス、17%がMARCHクラス、7%が国立早慶上智ICUクラス、30%が気にしないと回答した。短大・専門学校卒以下に回答した者はいなかった。子育てが終わったらパート、非正規で復帰すると答えた回答者の5%が短大・専門学校卒以下、6%が大東亜帝国クラス、19%が日東駒専クラス、11%が成蹊、成城、明治学院クラス、16%がMARCHクラス、4%が国立早慶上智ICUクラス、39%が気にしないと回答した。集計結果を表1に示す。

表1 職業観と結婚相手に求める学歴の関係



(10) 職業観と家計の担い手の関係

職業観と家計の担い手の関係を探るため、両質問項目のクロス集計を行った。その結果、職業観の質問項目において辞めると答えた回答者の72%が男性、28%が男性に限らないと回答した。産休、育休を使い継続就業すると答えた回答者の42%が男性、58%が男性に限らないと回答した。子育てが終わったら正社員として復帰すると答えた回答者の42%が男性、58%が男性に限らないと回答した。子育てが終わったらパート、非正規で復帰すると答えた回答者の64%が男性、36%が男性に限らないと回答した。集計結果を表2に示す。

(11) 職業観とジェンダー観の関係

職業観とジェンダー観の関係を探るため、両質問項目のクロス集計を行った。その結果、職業観の質問項目において辞めると答えた回答者の73%が男は仕事、女は家事中心がよい、27%が男は仕事、女は家事中心でなくてもよいと回答した。産休、育休を使い継続就業すると答えた回答者の23%が男は仕事、女は家事中心がよい、77%が男は仕事、女は家事中心でなくてもよいと回答した。子育てが終わったら正社員として復帰すると答えた回答者の40%が男は仕事、女は家事中心がよい、60%が男は仕事、女は家事中心でなくてもよいと回答した。子育てが終わったらパート、非正規で復帰すると答えた回答者の59%が男は仕事、女は家事中心がよい、41%が男は仕事、女は家事中心でなくてもよいと回答した。集計結果を表3に示す。

表 2 職業観と家計の担い手の関係

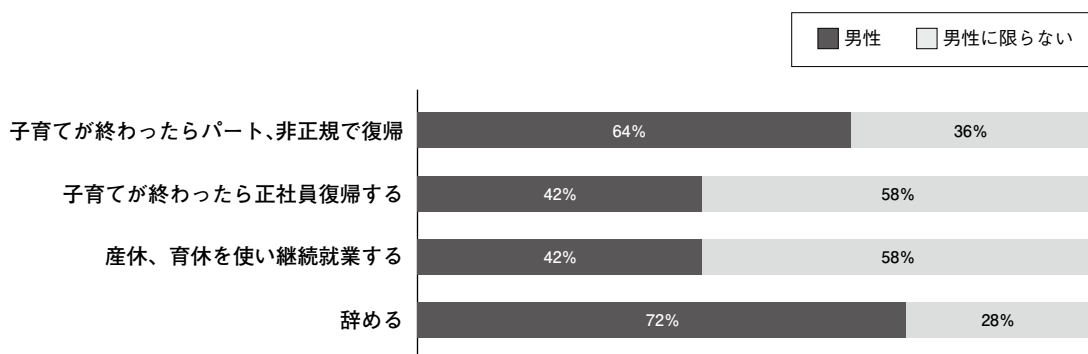
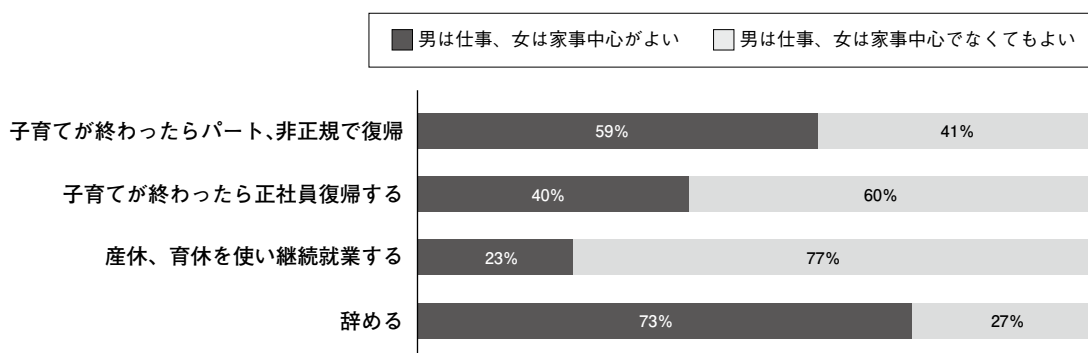


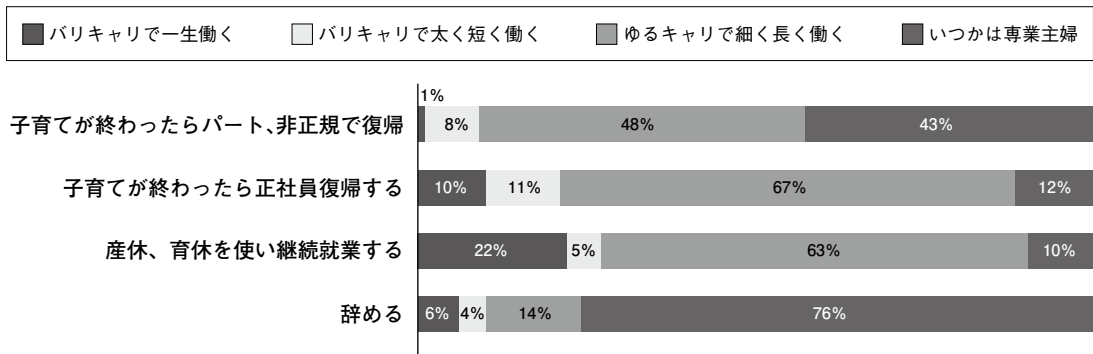
表 3 職業観とジェンダー観の関係



(12) 職業観と理想のライフスタイルの関係

職業観と理想のライフスタイルの関係を探るため、両質問項目のクロス集計を行った。その結果、職業観の質問項目において辞めると答えた回答者の6%がバリキャリで一生働く、4%がバリキャリで太く短く働く、14%がゆるキャリで細く長く働く、76%がいつかは専業主婦と回答した。産休、育休を使い継続就業すると答えた回答者の22%がバリキャリで一生働く、5%がバリキャリで太く短く働く、63%がゆるキャリで細く長く働く、10%がいつかは専業主婦と回答した。子育てが終わったら正社員として復帰すると答えた回答者の10%がバリキャリで一生働く、11%がバリキャリで太く短く働く、67%がゆるキャリで細く長く働く、12%がいつかは専業主婦と回答した。子育てが終わったらパート、非正規で復帰すると答えた回答者の1%がバリキャリで一生働く、8%がバリキャリで太く短く働く、48%がゆるキャリで細く長く働く、43%がいつかは専業主婦と回答した。集計結果を表4に示す。

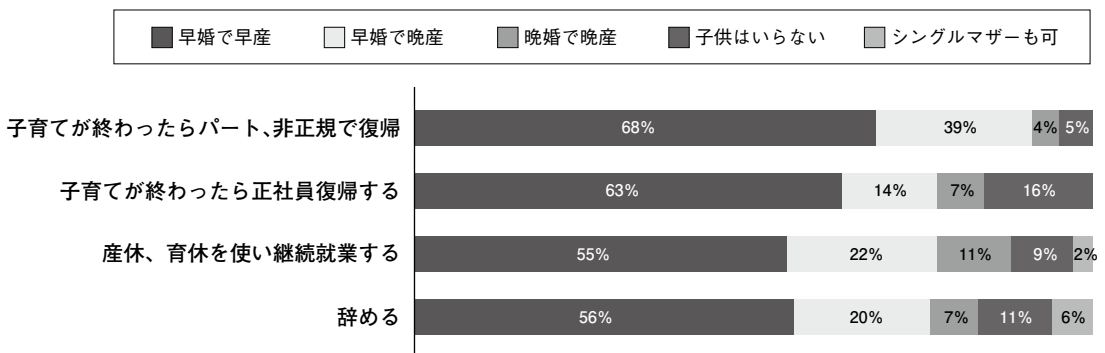
表 4 職業観と理想のライフスタイルの関係



(13) 職業観と理想の結婚の関係について

職業観と理想の結婚の関係を探るため、両質問項目のクロス集計を行った。その結果、職業観の質問項目において辞めると答えた回答者の56%が早婚で早産、20%早婚で晩産、7%が晩婚で晩産、11%が子供はいらない、6%がシングルマザーも可と回答した。産休、育休を使い継続就業すると答えた回答者の55%が早婚で早産、22%早婚で晩産、11%が晩婚で晩産、9%が子供はいらない、2%がシングルマザーも可と回答した。子育てが終わったら正社員として復帰すると答えた回答者の63%が早婚で早産、14%早婚で晩産、7%が晩婚で晩産、16%が子供はいらない、シングルマザーも可に回答した者はいなかった。子育てが終わったらパート、非正規で復帰すると答えた回答者の68%が早婚で早産、39%早婚で晩産、4%が晩婚で晩産、5%が子供はいらない、シングルマザーも可に回答した者はいなかった。集計結果を表5に示す。

表 5 職業観と理想の結婚の関係



4. 考 察

(1) ジェンダー感と結婚観の乖離について

主な家計の担い手についての質問項目と、男は仕事、女は家庭中心が良いかどうかの質問項目の一致度を求めた。その結果、回答者の72%が一致、28%が不一致と言う結果であった。これは、男は仕事、女は家庭中心という男女役割分業の結婚観には反対しつつも、やはり一家の家計

の担い手は夫であるという、ジェンダー観と結婚観が乖離している学生が28%いることを示す。この28%の内訳は「仕事はしたいが、家計責任は負うつもりはない」という働き方を望んでいると考えられる。このことから、今回対象となった女子大学大学生の間には、ジェンダー観と結婚観の間に乖離が生じていると考えられる。

(2) 職業観について

職業観について、出産したら仕事はどうするかという質問を行ったところ、産休、育休を使い継続就業するが51%だった。このことから、この大学の学生はM字型就労、または専業主婦志望より、就労しつづけたいという意欲が高いと言える。しかし、今回の対象者が大学一年生という年齢を考えると、この数字が4年間、現実の就活を通して変化していく可能性も考えられる。同じ学校の3年生のゼミで聞いたところ、ゼミ生12名のうち、「就職はする」が「ずっと働き続ける」と回答した生徒はいなかった。つまり「就職」と「働き続けること」は同義ではないということである。この点に関しては、今後縦断的に調査を行っていく必要があると言えるだろう。

(3) 職業観と理想のライフスタイルの関係について

職業観と理想のライフスタイルの関係についてクロス集計を行ったところ、「育休、産休をとって就業継続希望」というゆるキャリ志望が63%で、「子育てが終わったら正社員として復帰する」のM字型の場合も67%であった。これは、バリバリ働きたい、男並みに頑張りたいというよりも、ワークライフバランスを保てる程度に働きたいという意向が表れていると考えられる。これは近年の20代女性全般に言えることで、バブル期に形成された「バリキャリ」志向は一部の上位校の学生にしか見られなくなった。上位大学、例えば早慶以上の女性たちについては、早稲田大学的女子学生200人にアンケートをとったとき、半数が「一生バリキャリ」コースを選んでしたが、次に人気があったのは「いつかは専業主婦」コースだった。今後は他大学の学生との比較を通して、上位高と中堅校のライフスタイルの志向の違いを探っていく必要があるだろう。

(4) 職業観と理想の結婚の関係について

職業観と理想の結婚の関係についてクロス集計を行った結果、どのような働き方を選んだ場合も「早婚早産」志向が5割以上であった。一番働く意欲がある「育休、産休をとって就業継続希望」コースでも、現在30代後半、40代ぐらいの女性たちが結婚や出産に苦勞しているのを見て、後に続く世代は一刻も早く結婚し子供を産みたいと希望していると考えられる。「女性としてやるべきことを早めにすましておきたい」という志向は、専業主婦志望女性も、働きたい女性も同じである。20代は重要なキャリア形成の時期ではあるが、女性にとっては「出産にもっとも適した年齢」であることが悩ましい点である。かつての働く女性は「仕事のめどがついたら出産」と思っていたが、現在の女性たちは。企業の両立支援が整いつつあることも、その志向に拍車をかけていると言える。日経ウーマンオンラインのアンケートでは、一番幸せ度が高いのは9時から5時勤務の働き方だった。お給料が高くても、残業や不規則な労働時間で、自分のプライベートを削られる働き方には満足度が低い。仕事のやりがい、報酬よりもワークライフバランスを保てる働き方が女性たちには魅力的にうつると考えられる。

(5) 職業観と家計の担い手の関係について

職業観と家計の担い手の関係に関してクロス集計を行った結果、「育休、産休をとって就業継続希望」「正社員として復帰希望」を選択した対象者のどちらも、6割弱は家計の担い手は男と答えている。以前は7,8割までがそう答えていたので、「女性の家庭における家計責任が重くなる」ことを実感している層もでてきていると考えられる。逆にいえば「正社員として復帰希望」の4割が「家計の担い手は男だけではない」と答えているが、これは「子育て後の正社員としての復帰」が4人に一人しか叶えられないという現実を知らないからだと考えられる。

(6) 職業観と結婚相手に求める学歴の関係について

職業観と結婚相手に求める学歴の関係についてクロス集計を行った。その結果、この女子大学は偏差値的には「大東亜帝国」クラス的女子大だが、望む結婚相手の学歴は、最多の「気にしない」を除けば、どの職業観の女性も、1ランク、2ランクほど上の「日東駒専」「MARCH」が多い。「上方婚」志向は変わらないが、相手もそれほど高望みはしないほどほどのところがいいという志向は、いまだきの20代らしさと言える。結婚出産したら「辞める」と答えている、専業主婦志望の女性たちは、一番学歴について「気にしない」が多い。これは、「ライフコース」や現実の結婚生活について、深く考えていない層という可能性が考えられる。今回の対象者の多くは大学1年生だった。今後は他の学年や他の学校と比較することにより、また新たな見解が得られるだろう。

(7) 総合考察

この中堅女子大の女子大生たちの望むライフコースは、ゆるく働き続けつつ、早期に結婚し、出産するということ、もしくは子育て期間中は一時的に家庭に入り、子育て後にパートなどで復帰するである。しかしこの仕事、結婚観を支えるためには、「一人でも一家を養える夫」の存在かまたは「ワークライフバランスがとれる安定した仕事」が必要である。「一人でも一家を養える夫」は年々、希少な存在となり、望む限り結婚年齢は遅くなる。また今の日本の女性の仕事は「正社員でワードワークな高キャリア」か「非正規で不安定で低賃金の低キャリア」の二種類に分かれている。現実的に女性たちが結婚して子育てをするには、やはり「夫婦ともに働き、家事をする」男女共同参画型になることが望ましいし、男のリストラや給与カットを考えると、男女ともに正社員であることが望ましい。しかし、長時間労働の慣行から、正社員女性の出産後の両立はまだ厳しい状況だ。現在未婚女性の正規社員率は5割ほどなので、育児休業などの恩恵がうけられる女性も、半分しかいない。離婚率も36%であるので、出産して仕事を辞め、その後離婚すると貧困のシングルマザーになってしまう確率が高い。女性たちが結婚、出産に踏み切るには、やはり足元の安定が必要だ。かつては年功序列、終身雇用の会社で働く男性がその安定になってきたが、今は違う。女性たち自身が、子育ても望めるような環境で、長く継続就業できる仕事、柔軟な働き方を認める働き方の革命が必要なのではないか、それが一番の少子化対策になるのだと考えられる。

5. 結 論

今回の調査から女子大学生の間では、女性の結婚観やジェンダー観と、職業観の意識の間にズレが生じている可能性が明らかになった。また、今回調査対象となった女子大学生たちの望むライフコースは、ゆるく働き続けつつ、早期に結婚し、出産すること、もしくは子育て期間中は一時的に家庭に入り、子育て後にパートなどで復帰するということも明らかになった。今後はさらに多くの大学や学年において調査を行い、検討を進めていく必要があるだろう。

参考・引用文献

- 厚生労働省 (2011)「人口動態調査」<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai10/index.html>
- 森本恵・中嶋有加里・山地健二 (2000)「大学生女子の結婚、出産、育児および就業に関する意識調査」『高地医科大学紀要』16, pp.65-76
- 日経ウーマンオンライン「実は一番幸せ!? 「9～17時勤務」人気の理由」2011年6月13日
- 山田昌弘 (2010)「「婚活」現象の社会学 日本の配偶者選択の今」東洋経済
- 山田昌弘・白河桃子 (2008)「「婚活」時代」ディスカバリー携書